

幕末明治の写真師列伝 第四十五回 内田九一 その十

大阪時代の内田九一について話を戻すと、『故内田九一短歴』には、「先生時ノ將軍慶喜公ヲモ撮影センコトヲ乞フ 而シテ一布衣ノ力以テ奈何トモスベカラザルヲ悟リ故サラニ志ヲ枉テ大久保候（大阪町奉行）ニ仕へ已ニ帯刀ヲモ許サレ用意リナシ而ルニ物議騒然遂ニ果サズ」と記載されている。これは『アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号』（東京朝日新聞社）巻末の「写真資料展覧会出品目録」にある、「京町奉行大久保主膳正家来寫 大久保主膳正家来と言ふのは、其の実内田九一」という記述と一致する。

また、『アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号』（東京朝日新聞社）の付録で、『写真百年祭記念講演集』の「日本最初の写真師」の項では、理学博士・長井長義（注1）が「尚私が唯今持参して居ります寫眞は慶応二年、三年と明治三年頃東京で矢張り上野先生の所に居つたと聞きました内田九一といふ人に撮ってもらひました寫眞であります」と述べて、内田九一の写真を今回の写真百年祭に出品したと話しているが、詳細については不明である。後に第七代大阪商業会議所会頭となった土居通夫が慶応年間時代に大阪にいた当時の頃を語る、半井桃水編著『土居通夫君伝』（「八 寫眞師の弟子」の項）によると、「當時石町に小曾根正雄といふ長崎の人來りて寫眞館を開業せり、小曾根自身は技術に於て左程上手といふにあらざりしが、技師には内田九一を備ひ、自分は館主の名儀となり、以前長崎奉行勤めし頃相知れる大久保肥前守が今京都の町奉行となり居たるを便り、其斡旋により大阪在城の旗下以下を花主として營業頗る繁昌せり。君は此事を早くも聞出し、幕府の内情を探るのは幕臣に近づくが捷徑、夫には小曾根に身を寄せて彼が弟子たらんと思ひ極め、一日小曾根が許を訪うて、先づ一枚の撮影を求め、然る後自分は寫眞傳習の弟子たらん事を申入れしに、小曾根は快よく承諾を與へ、先づ硝子磨きより始めて次第に技術を授けんといへり、君は深く喜んで高池に立歸り、病氣養生の爲と称して暫くの暇を求め、是より小曾根の寫眞館に止宿して硝子磨きの職に就き、只管機會を窺つては幕臣に接近せり、君が富永冬樹翁と相識るに至りしも、當時翁が御徒士目附として長州征伐に隨從したる大阪在城中の事なりしといふ。小曾根が寫眞館を開きしも、実は營利の目的に非らず、斯くして旗下の士に収入り、やがては自分も將軍家の直参たらん事を望み、其野心を充さん爲の階梯に過ぎざりしなり。（後略）」とあり、木下博民著『通天閣 第七代大阪商業会議所会頭・土居通夫の生涯』（創風社出版、2001年）によると、「（前略）石町に、長崎から来た小曾根正雄という男が経営する、写真館があった。写真技師に内田九一を雇ひ、長崎奉行から京都の町奉行へ転任となった知人、大久保肥前守の口添えで、大坂城にいる旗本たちを得意とし、繁盛していた。遠く江戸を離れ、明日もしれない不安な身の幕臣たちにとっては、写真は格好の形見であつたのだろう。（中略）一八六六（慶応二）年夏、小曾根は九一を伴つて、京都の町奉行大久保肥前守を訪ねた。あわよくば將軍家の直参に取り立ててもらいたい、そんな野心が小曾根にはあつた。（後略）」とある。

また、篠田鈺造著『幕末百話』では、

「素人の写真」

第一の写真は私二十一歳の時で、長州征伐に赴く前でありました。元治年間で講武所奉行の渡辺甲斐守（五千石）の息子さんが寫したもので、素人としては感心によく寫しました。和洋折衷という服で、窮屈なもので、しかし勇ましい点もありました。手前味噌ながら・・・

「オランダ式」

第二の写真は長州征伐の時で、私共大手前は御中軍と称して、將軍警衛で、大阪表まで赴きました。大阪表の写真師は、天満橋向の「九一」というがその頃名人でした。紙写三枚で代価は三分を払つたです。この時はまたさした変化もありませんでしたが、時代の趨勢は恐ろしく、第三の如く態を変えさせます。もっともこの時分は阿蘭陀式であつた。」と、記述されている。

次に『日本写真史年表』などで「慶応二年一月、内田九一、横浜馬車道に移る」と書かれているが、ここで内田九一の履歴で最大の謎として、内田九一がいつ、どうやって大阪から横浜馬車道、江戸に東上したかという問題について再検討してみることにしてしよう。そこでこれまで前述で紹介した参考文献の記述などをくどいようだがもう一度見てみることにする。

①「既に天下の趨勢を洞察し、大阪を去て江戸に向はんと欲す、偶々幕府の軍艦「回天號」東上するに會し、便船を請うて江戸に出づ、時に慶応二年なり。」

（「本邦寫眞家列傳（其十四）・故内田九一」より）

②「翌二年將軍慶喜公江戸に帰還するや先生亦艦に陪して東す」

（「月乃鏡」、「故内田九一先生」の項より）

まず、②の「將軍慶喜公江戸に帰還するや」は、慶喜公が江戸に戻つたのは慶応4年1月のことであるから、明らかに誤りである。このあたりの事実関係がごっちゃになって「慶応二年一月、内田九一が慶喜公が江戸に戻つた時にいっしょに江戸に行った」というような記載が、『日本写真史年表』や『アサヒカメラ』などの諸書に記載されているが、「慶応二年一月に」というのは、慶喜公が江戸に戻つたのが慶応4年1月であることからこれも矛盾する。

注1：長井長義

我が国薬学の創始者、長井長義博士は1845年、阿波藩の典医の家に生まれ、長じて医学を学ぶため長崎に留学した。維新後、軍医となったが、1872年ベルリン大学に留学、薬学の道を選んだ。1884年、医薬品の国産化のために国が設立した製薬会社の技術指導者として政府に懇請され帰国。翌1885年、漢方で古くから使用されて来た麻黄という薬用植物から、世界で初めてその有効成分「エフェドリン」を発見した。エフェドリンは、優れた鎮咳剤として一世紀を経た今日においてなお、世界中の医療の場で繁用されている。1929年2月10日没。『アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号』（東京朝日新聞社）巻末にある「写真史料展覧会出品目録」には、「長井長義氏所蔵△上野彦馬氏撮影の写真（名刺形）八枚」とあるのみで、その詳細は不明。 （森重和雄）